

Notes on the Fiesta Complex of a Patron Saint in Mesoamerica : A Comparative Analysis with Emphasis on Data from the Highland Mixe Village of Tlahuitoltepec and Ayutla, Oaxaca, Mexico

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 悦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004594

守護聖人の祭りにみられる民俗芸能について

—メソ・アメリカの例の比較の試み—

黒 田 悦 子*

はじめに

1. 伝統的な守護聖人の祭り

—ミへの村, トラウィの例—

1) ドラマとしての祭り

2) 芸能の要素についての論評

2. 変容した守護聖人の祭り

—ミへの村, アウトラの例—

3. メソ・アメリカの他地域からの比較例
おわりに

はじめに

メソ・アメリカの社会, 特にインディオ社会や農村には, 種々の祭りがみられる。それらは一様にフィエスタと呼ばれているが, 次のように大別できる。役職交替の祭り, 守護聖人 (もしくは主要聖人) の祭り, その他の聖人の祭り, カトリックの主要な祭り (四旬節, 復活祭, 万霊祭, 降誕祭), シンクレティズムに起源をもつ祭り, 宣教師の主催する新しい祭り, 国民祝祭, といったものがあげられる。このうち, 本稿では特に, 守護聖人 (もしくは, 主要聖人) の祭りをとりあげて, この祭りにみられる数々の芸能の要素のドラマ化, 要素の起源と機能, 機能の変化, 文化領域や地域差にもなってみられる変異を考察してみたい。

本稿の試みの必要性を感じたのは, 私が調査したミへの村の守護聖人の祭りについての資料をまとめている時であった。トラウィとアウトラという二つの村の祭りをみるに, 芸能の要素は同じであっても, その機能に大きな差のあることがわかった。基本的には同じタイプの守護聖人の祭りが二つの村では機能上別な形で存在していた。この機能の差, また芸能の要素にみられる若干の変化を考察することは二つの村のこうむっている社会変化や文化変化の一面にふれるよい機会であった。同時に, 守護聖人の祭りにみられる芸能の要素の検討をミへ以外のメソ・アメリカの例にも試みて, 比較の視点を養うことが必要であった。以下はこの試みを報告したものである。

第1部は, 伝統的ミへの村, トラウィにおける守護聖人の祭りの進行状況の叙述と

* 国立民族学博物館第4研究部

その芸能の要素の論評にあてられている。第2部は、変容したミへの村、アユトラの祭りの記述、分析にあてられている。ここでは、トラウィと同じ芸能の要素がいかにかに世俗化した形で機能しているかという事実に記述の焦点がおかれている。第3部は、グアテマラ、チャパス、オアハカ、ユカタン半島、中央メキシコ、ミチョアカン、メキシコ北部といったメソ・アメリカの地域性を代表する村や町（主としてインディオ社会）で守護聖人がどのように祭られているかを文献にもとづき概観したものである。

第3部はあくまでも素描であり、比較の視点をえるための覚書である。なお、守護聖人の祭りを扱うかぎりは、その経済的・組織的側面を無視するわけにはいかない。これらの側面は行政・宗教組織と深くかかわってくる問題であり、祭りの実行を左右するものである。このテーマについては別稿にて扱うはずである。なお、守護聖人、もしくは主要聖人の祭り、と特記したのは、後の論述にもあきらかになるように、いわゆる守護聖人の祭りが主要聖人の祭りによって替えられる事例も多いからである。

ミへの祭りの観察に際しては、数えきれないほど多くの人々にお世話になった。特に、Monseñor Braulio Sánchez, P. Leopoldo Ballesteros の両氏には色々と便宜をはかっていただいた。また、本研究ノートを作成するにあたって、Prof. Arturo Warman の著作に刺激をえることが大きかったことを記して、謝意を表したい。伊藤幹治教授には原稿をみていただき、諸々修正すべき部分を御指摘いただいた。深く感謝いたします。

1. 伝統的な守護聖人の祭り

——ミへの村、トラウィの例——

トラウィには三つの主要な祭りがある。復活祭から40日目に行なわれる Sr. Ascensión の祭り、8月15日の Santa María Asunción の祭り、と12月12日の Guadalupe の祭りである。トラウィの守護聖人は Santa María Asunción なので、Asunción の祭りが一番大きな祭りになるはずなのであるが、実際には Guadalupe 祭が最も華やかにとり行なわれる。その理由は次のように説明できる。カトリックの守護聖人は宣教師により各村に与えられたものであって、かならずしも自然環境を考慮して選ばれていない。たまたま、村人にとって祭りの実行が困難な季節に守護聖人の祭日があると、祭りの規模は小さくなり、村最大の祭りとなりえない場合が多い。トラウィの例がよい例である。Ascensión と Asunción の祭日は雨期にあたり、人々のトウモロコシの貯えも底をついている。一方、12月は収穫の時期にあたり、どの家族でもトウモロコシがあり、祭りを楽しむよゆうがあるので、Guadalupe 祭が村一番の大祭となる傾向がある。

これらの祭りを始まりから終りまで綿密に観察するのは予想外にむづかしい。時と

して、祭りの進行は筋書き通りにいかず、或る部分が抜けたり；例年とは異なった時点で行われたりするからである。また、同一時点で複数の行事が異なった場所で行われることもあるので、人類学者がひとりで、どの行事をも眼にしようとしても、むづかしいことがある。しかし、上記の主要三聖人の祭りの要素と進行状況には一定の類似性があるので、これらの祭りを何回も観ることによって、祭りの一般類型を抽出することができる。以下にその概略を記してみよう。

1) ドラマとしての祭り

Novena (祭りの当日より前の9日間)

Novena が近づくと、役職についている者は祭りの準備をはじめめる。ムニシピオの役人は近隣の村に招待状を送って、楽隊とバスケット・ボールのチームを勧誘する。さらに、村人の何人かを *capitán de la banda* に任命して、他村からくる楽隊に食事をまかなう役をあてがう。また、Guadalupe の祭りには闘牛があるので、ムニシピオの役人は *topil* と呼ばれる一番低い役職についている若者をランチョにさしむけて、木材を探させ、闘牛の柵を作らせる。

教会の役人は教会附属の *topil* をオアハカ市やアユトラにおくって、ローソクを作るためのろう、支那の紙と呼ばれる薄い色紙、その他、教会の装飾に必要な品々を買い求めさせる。

学校関係の役人は踊りや娯楽番組を生徒に教える。

村の家々では、テパッチェという飲物が大きな壺に用意され、祭りのための食物の準備も徐々にととのっていく。祭りの前の週の土曜の市には大勢が詰めかけ、台所の品々をととのえて帰っていく。

村の楽士は *capillo* と呼ばれるリーダーの家に集まって、祭りの曲の練習をしている。

一見、村は静まりかえってみえるが、どこかで誰もが仕事に励んでいる。

Calenda (祭りの前々日)

この日、教会付の *topil* は支那紙で教会に装飾をほどこし、竜舌蘭の茎の白い部分を組み合わせ花のようにして教会の扉にはりつける。これは、クチャーラ・テ・マゲイと呼ばれ、白と緑のコントラストが美しい。広場では闘牛用の柵ができて上っている。*topil* 達は上司の *mayor* の命令のもとに広場をはき清めている。

陽が落ちる前に、他村の楽隊が到着する。たいていは、一楽隊しかこない。年によっては祭りの前日までの楽隊も着かないこともある。大体において、一楽隊が *calenda* の夕方に到着し、他の楽隊は祭りの前日にやってくる。招待された楽隊が村の入口につくと、楽隊のレセプションが行われる。径にはレセプションのためにカリソという竹でつくられたアーチがこしらえられている。このアーチのあるところまでトラウィ

の村長は *capitán de la banda, madrina de la misa* (ミサを支払う人), *sacristán* (教会の儀式の世話係), *トラウィ*の楽隊を従えて出むいていく。そこで、訪問してきた他村の楽隊にあいさつする。遠路はるばる訪問してくれたことをねぎらうと、訪問してきた楽隊の長も返礼して、招待を感謝し、祭りの成功をいのる。そこで、*トラウィ*の楽隊は一曲かなでる。すると、到着した楽隊も一曲かなで、その後、両楽隊はマーチを演奏しながら教会まで歩いていく。

両楽隊は教会の前でとまる。そこでは、*capitán de la banda* が招待されてきた楽士を待ちうけていて、メスカル酒三杯とタバコ三本を与える。これが終ると、マーチかダブル・ステップの曲をひきながら楽士は教会に入る。教会内では *Letanía* という植民地時代から伝わっている古い曲をひき、楽士をひきいる *capillo* はこの曲の後、祈りつつける。それから、楽士と *capillo* は自分の村から持ってきたローソクに火をともし、供え物として教会に残していく。これが終ると、全員教会の外に出てきて、*トラウィ*の楽隊と共に演奏しはじめる。しばらく演奏した後、遠路はるばるきた楽隊は *capitán de la banda* の家につれていかれる。

*トラウィ*の楽隊は訪問してきた楽隊を *capitán* の家に連れていってから、*marmota* (竹の棒の上に薄紙でつくったランプをつけたちょうちん) と *mono* (竹の棒の上に支那紙をはって動物、飛行機、巨人の形にしたもの) を先頭にして、*トラウィ*の楽隊を饗応する *capitán* の家にむかう。時によっては、楽隊の *capillo* の家に行くこともある。村人の中でも男子だけが楽隊についていって、*capitán* の家の中庭で *marmota* と *mono* を手にもって踊る。*capitán* がランチョに居住する人である場合は、広場の近くに住む親族にたのんで祭りの時だけ家を貸してくれるようにする。楽士はテパッチェとメスカル酒に気をよくして、演奏もはずむ。踊りが一段落つくと、楽士にはテパッチェ、メスカル、フリポル豆の煮たもの、トルティーヤが与えられる。その頃、教会の鐘がつかれ、ロサリオの始まりを人々に告げるが、大勢教会に出向いていった気配でもない。

夜の9時か10時頃、*paseo de la calenda* がはじまる。*トラウィ*の楽隊と到着した楽隊は音楽を奏し、若者と *topil* は爆竹 (*cohete*) を空にうちあげ、子供達は *marmota* の中にローソクをともし *mono* と一緒にしてかつぎまわる。彼等是一緒になって村をねり歩き、教会の前に戻ってくる。そこで、二楽隊は元気よく演奏し、人々は一時間以上も踊りまくる。それから再び、同じグループが楽隊と共に村の中心部をねり歩く。次の日の朝方まで音楽がかなでられている。この *paseo de la calenda* は祭りの予告をするものと解釈されている。

Víspera (祭りの前日)

早朝からフルートと太鼓の音が聞こえる。

午前中にミサが一つあげられてしまう。午後になると、*madrina de la misa* の人

びとがりボンや色彩華やかな支那紙で飾ったローソクを教会に持ってくる。フルートと太鼓の奏者を先頭にして、10人以上の *madrina* からなる行列は教会へとむかう。彼等のあとにつく楽隊が *Letanía* を奏し、*alcalde* (行政・宗教両組織の頂点に立つ人) が行列の最後についている。この行列はローソクを教会に捧げるためにくまれており、これで *madrina* から祭りのためのミサが要請された、と了解されている。しばらく時間がたってから、同じ *madrina* 達はフルート奏者、太鼓打ち、楽隊と共に再び教会に戻ってきて、*Letanía* の曲にあわせて祈りをささげる。

夕方の7時に晩の祈りと暁の勤行が同時に行われる。同じ頃、招待された楽隊が他村からついて、*alcalde* とその補佐は既述のように、楽隊のレセプションの際の決まった方式ののりとして各楽隊を受け入れる。教会での祈りが終ると、人々は広場に坐って、花火の時間がくるまで待つ。楽隊は松の炬火の近くで演奏し、酔いのまわった人々は既に踊りはじめている。少したつと、各楽隊は *capitán* の家に招かれて、食事をとる。

真夜中近く、暗闇を教会の鐘の音がひびきわたる。*castillo* と呼ばれる仕掛花火の開始を告げるためである。石油ランプの明かりをたよりに、楽隊がいくつも広場に到着する。一つの楽隊が新ムニシピオに場を占め、他の一つがキオスクに登り、残りは旧いムニシピオに座をしめる。

突然、トラウィの楽隊が軽快な曲を演奏すると、花火がはじまる。広場は見物人で一杯である。女は旧ムニシピオの建物の所にかたまって花火をみている。男子や子供は花火の火花をかぶりながら踊りはじめる。まさに、生命がほとぼしっているような光景である。他村からきた楽隊もかわるがわるに演奏する。花火がもえつきるまで半時間はかかる。最後の火花が地上に落ちると、見物人は一斉に言う。「ありがとう。花火職人さん」。広場は元の暗闇に戻る。

この夜の出し物はみんな計算ずくめのタイミングで出てくる。広場の片隅から *torito* と呼ばれる牛の頭の形にはめこんだ花火をせおって一人の男がでてくる。*torito* はダブル・ステップの軽快な曲に合わせて踊り、子供達におどけた仕草をしてみせる。この道化めいた *torito* の動きに見物人の笑いが集まる。その横で *ruedas Catarinas* と呼ばれる車輪のように動く小型の花火がしかけられている。広場の一方では、何人か男子が寄って、軽業のための木の枠と、道化師と空中軽業を演じる人のためのブランコを組み立てている。

torito の踊りがおわると、ブラウスとスカート姿に女装した8人ばかりの若者が出てきて、*maroma* と呼ばれる軽業を演じる。

道化師 *payaso* が、メスカル酒を一本持って現われる。虎じまの青線の入ったヴェージュ色のダブダブの道化服をきて、顔はパウダーで白く塗られている。楽隊の演奏する楽しい曲にあわせて道化師は踊る。曲の切れ目がくるごとに、韻をふくんだ台詞 (*rimas del payaso*) をとぼし、メスカル酒を口にふくんで、霧のように吹き出す。

これは軽業の若者、つまり *maromero* と呼ばれる人々に危険のないように祈って神に捧げる酒だと理解されている。道化師がスペイン語で韻をふくんで冗談をとばすと、言葉がわからないので、見物人には何の反応も示さない。ミヘ語で冗談を言うと、どんな短い台詞にでも、人々は笑いころげる。まもなく、*maromero* はロープにのぼり、棒を支えながら綱渡りをする。上手な若者は拍手をうける。

maromero 達が疲れてしまうと、道化師は空中ブランコにのり、冗談をとばし、空中軽業を演じてみせる。

今や、ダンス (*bailes populares*) が始まり、人々は *Jarabe Mixe*, *Fandango Mixe*, *Rey Kondoy* のリズムに合わせて踊りはじめる。前の二曲は男女の組で踊るダンス曲であるが、トラウィでは男子は一組になって、女子は女子で別の所で踊る。酔った男女だけが組になって踊り、人々の視線をうけている。どの楽隊も次の日の朝まで演奏を止めない。メキシコの最近のレコードもムニシピオに備えられた蓄音機からきこえる。マリアッチの名曲、アカプルコ・トロピカルという名でこの頃メキシコで有名になった楽団とボーカル・グループの曲、ノルテーニョ・スタイルの曲、が次々と放送される。これは1974年にはじめておこったことであった。とにかく、四方八方からの音楽と騒音で、広場の近くの家の人々は一晩中ねつけない。

Fiesta (祭りの当日)

午前中にミサが二つたてられる。二番目のミサは *misa cantada* といって歌つきのミサで、祭りのためのミサである。これが終ると、フルート、太鼓の音がきこえ、ついで教会の鐘がつかれ、爆竹が打ち上げられる。広場では、また *maroma* が始まっている。昨夜の疲れが残っているのか、軽業の若者もふらふらと綱を踏み損じて、下に落ち、見物人の笑いをあおりたてる。

Guadalupe の祭りの時だけは、朝のミサの後と午後に闘牛 (*jaripeo*) が行われる。楽隊が闘牛用の特別の曲を弾くと、闘牛がはじまる。見物人は柵に近寄り、熱心に見物する。ある者は柵に馬乗りになっている。ムニシピオの *topil* が助手と共に柵の周りをまわって、混乱のおこらぬよう取り締まっている。若者が牛を柵に入れようとする。にわか仕立ての闘牛士はトラウィの若者で、バナナの葉のような繊維でつくったむしろやポンチョ (*gabán*) を手にもって牛にむかって、プロの闘牛士気取りである。ところが牛はランチョの人々から借りてきたもので、闘牛にはむいていない。ゆっくりと歩んで一向に人につかかってこない。若者は牛の尻尾をかじって、牛をいからせようとする。こうして牛をいきり立たせないと、闘牛を演じるわけにもいかないのである。

午後の2時か3時頃、*Los Negritos* のダンス (*danza*) が演じられる。*Cubanos*, *Santiago*, *los Mal Viejos*, *Coloquios* も時として演じられる。ダンスの出し物は祭りによって異なるが、*Los Negritos* はどの祭りでもみられる。

3時頃、仕掛花火 (castillo) の支払いをする *madrina del castillo* 達が、親族の男達にともなわれてムニシピオの前に姿をみせる。村長の前で、花火職人に花火の代金を手渡す。それをうけとると職人達は三曲 (sones) 踊る。それにこたえて、*madrina* 達も三曲踊る。こうして、花火職人への支払いが終る。

運動場では、他村からきたバスケット・ボールの選手達が試合をはじめ。さらにしばらくたつと、学校の先生が生徒を動員して、色々な娯楽プログラムをひろうする。劇のひとつとか、メキシコの他地方のダンスが先生の指図のもとに演じられる。

.....

祭りの次の日、朝の内にミサが、午後にはロサリオが祈られる。3時頃、再びダンス (*danza*) が演じられる。運動場ではバスケット・ボールのチームが選手権をあらそっている。同じ頃、*madrina de la misa* の行列が教会から出てきて、*madrina* の一員の家へとむかう。たいていの人はこの行列に気づかない。皆、ダンスやバスケット・ボールの試合に気を取られているからである。行列に人が少なく、寂しい折には、楽隊の先頭に立つ *capillo* は楽士に命じて賛歌 (*alabanza*) の代りにマーチを演奏させる。家につくと、*madrina* とその関係者はテパッチェを儀式にのっとつのみ、爆竹をあげて、*madrina* の責任が終ったことを村人に知らせる。

次の二、三日の間、祭りはつづく。しかし、日一日と閑散としてくる。ダンスとバスケット・ボールの試合は続くし、酔いつぶれた人も後をたたない。しかし、他村からきた楽隊も一つ一つと自分の村に戻っていく。各々、トラウィの楽隊におくられて、村の端まで行き、そこで儀礼上別れの曲が演じられ、それから村に戻っていく。こうして、祭りの華やかさは消えうせ、村には元の静けさが戻ってくる。

2) 芸能の要素についての論評

フルート (*flauta*) と太鼓 (*tambor*) を除く他の芸能の要素はみな征服以後の起源のものである。calenda の夜の *marmota* と *mono*、楽隊 (*banda*)、ダンス (*danza*)、踊り (*bailes populares*)、仕掛花火 (*castillo*)、牛型の花火 (*torito*)、闘牛 (*jaripeo*)、軽業 (*maroma*) と道化 (*payaso*) がそれらである。

フルート (*flauta*) と太鼓 (*tambor*)

これらの楽器はインディオ起源のものである。祭りの間中、毎日、ミサの前後に演奏される。楽隊と共に、*madrina de la misa* の行列にも加わる。また、Santiago のダンスには曲を4部にわたって演奏する。

Rancho Guadalupe ではフルートとマンドリンの奏者がいて、トラウィの中心部では聞かれないような曲、それもスペイン的なリズムでない曲をひく。これらの曲が忘れ去られない前に記録にとっておく必要がある。

フルートと太鼓の奏者は2ないし3組いるが、その技能を保存し、育てていく策は

なにもとられていない。興味のある人、もしくは音楽の才の有る人が習得しては、次の世代に伝えているのが実状である。

楽 隊 (banda)

祭りの記述からあきらかなように、楽隊は祭りの全進行過程で欠かせない要素である。banda filarmónica と呼ばれるこのタイプの楽隊は高価な金属製楽器を備えており、19世紀から20世紀に世紀が移る頃の産物と思われるが、ミへの村々に何時、どのようにして入ってきたかについて知ることはできなかった。ともかくも、ミへはこの出費のかかる楽隊をうけ入れ、維持している。

高地ミへの村々ではサポテカの村ベタサから音楽の先生を呼んで、音楽の腕をみかくのが常であったが、現在、このならわしはずたれはじめている。ミシストラ村では今でもベタサから先生をむかえている。トラウィでは外から音楽の先生をむかえることはなくなった。

どのミへの村でも楽隊の組織があって、これはなかなか廃れそうにない。楽隊が大きすぎて、時としてムニシピオの財政を困難におとし入れることにもなりかねない現状である。ミへの楽隊は時としてオアハカ平野の村々の楽隊よりずっと大きく、よく整備されている。だから、度々オアハカ市に招待されて、選挙の催しや祭りに参加している。

楽隊があることで、若者は他のミへの村々を見物する機会にもありつく。守護聖人や主要聖人の祭りには、楽隊が他村から招待される。以前、トラウィにはハヤカステペック、サカテペック、ケツェルテペック、ヤララ、ベタサ、サン・マテオ・カホノスなどの遠方の村々から楽隊が訪問してきた。最近では楽隊が近くの村からよばれる傾向になって、ミシストラ、チチカステペック、ウイテペック、ヤコーチ、エスタンシヤ・デ・モレロス、タマスラパム、アユトラからくる。いずれにしても、楽隊の招待は村と村の交流に大きな役割を果たしている。

スペインで発達したカトリックの祝祭複合はモロ人からスペインを奪還しようとする再征服のテーマを中心に展開した。この祝祭複合は12世紀に起源をもち、時がたつにつれ一定のスタイルを持つようになり、15,16世紀に広く伝播し、派手な催し物となったらしい [WARMAN 1972: 17-27, 28-55]。この間の歴史的経緯については Arturo Warman の *La Danza de Moros y Cristianos* に詳しく論述されているし、Kurath の 1964, 1969年の著作もこの種の問題について多くの知識を与えてくれる。スペインで確立した中世カトリックの祝祭複合は新大陸の発見と共に征服文化の一部として持ちこまれ、ミへの村トラウィにもその形跡を残すこととなった。モロ人とキリスト教徒のテーマに集約される数々のダンス (danza)、踊り (bailes populares)、花火 (castillo)、牛型の花火 (torito)、闘牛 (jaripeo)、軽業 (maroma)、道化 (payaso) が上記の祝祭複合に属するものである。また、marmota や mono もおそらくこの祝祭複合に属す

るものと考えてよかろう。以下に、トラウィで見出されるこれら祝祭複合の要素について述べてみたいと思う。

Calenda の日の marmota と mono

marmota は大型の提灯で、長いカリソ竹の頂上に支那紙でつくったぼんぼりをつけたものである。mono はカリソ竹でつくった枠組に支那紙または布をはりつけた張り子である。飛行機、地球、巨人、スカート姿の女、などの張り子がある。子供や男が marmota や mono を持って、calenda の夜、村中、特にプラサの近くの家々をねりあるく。

ずっと以前、トラウィでは支那紙のかわりに聖人の姿を印刷した *estampa* と呼ばれる紙が marmota にはられていた。これをはると、中にローソクをともした時、聖人の姿が照らし出されて、祭りの宗教的目的によくなくなった、ということである。1929年から1933年にかけてミトラの町で調査した E. C. Parsons はこのタイプの marmota の存在を次のように記している。「San Pablo の marmoto [marmota のことである。私注] は木綿の布をはった巨大な球で、その上に San Pablo が馬に乗って河を渡っている姿が描かれている」と [PARSONS 1936: 241]。この例が示すように、marmota は布教の目的にかなうようつくられていたものと思われる。

ダンス (danza)

トラウィで演じられるダンスは植民地時代に由来するもので、殆どがモロ人、もしくは異教徒とカトリック教徒の闘いをテーマとするものである。Los Negritos, Los Cubanos, Santiago と Coloquios がそれらであり、Los Mal Viejos のダンスだけが例外である。

Los Negritos はトラウィでも、その他の高地ミへの諸村でも一番普及している。どの主要聖人の祭りでも演じられる。他のダンスは時々演じられるにすぎない。Los Negritos のダンスでは8人の踊り手が一組になっておどる。服装や踊り方は広くメキシコにみられる Los Negritos と似ているが、リズムとステップのとり方は村によって大きな差がみうけられる。

Los Cubanos はトラウィだけで演じられる。Los Negritos に酷似したダンスである。衣裳はより派手な色あいで、音楽のリズムがより強いことが差とみえる。

Santiago は隣村のタマスラパムでも踊られる。タマスラパムでは二人の踊り手の腰に馬の張子をくくりつけ、聖人 Santiago の馬上の姿を表現している。二人の Santiago 役者は赤い旗を持った従者と現れ、フルートと太鼓の音に合わせて踊る。トラウィでは、5人が一組になって踊る。1人は Santiago, 3人が赤い旗を持った従者で、赤い旗は征服を象徴している。残りの1人は viejo (としより) と呼ばれる役で濃茶の仮面をつけている。この viejo は道化役を演じながら、見物人が踊り手に近よりすぎないように護衛の役を果たしている。縄をふりまわして見物の子供をからか

ったり、捕えようとするふりをして、人々を楽しませる。Santiago のための音楽は楽隊で演奏されず、フルートと太鼓奏者の手にまかされている。音楽は4部に分かれ、各部の切れ目で踊り手は休む。総計2時間以上続くダンスである。

Coloquios はここ18年間演じられたことがなかったが、1974年11月に司祭の誕生日を祝う目的で、cantor が小学校の生徒に教えた。一人の女の子がマリンチェの役を演じ、一人の仮装した男が道化役を演じた。音楽は36小曲からなる大部なものであるが、この時には6曲だけが演奏された。

征服のテーマから外れているダンスは Los Mal Viejos である。これはヤララとチチカステペック村でみられる Huenches のダンスと親縁関係のあるダンスだと思われる。ヤララの Huenches については De la Fuente が報告しているし [DE LA FUENTE 1949: 280], チチカステペックのものは私が実際に見物した。チチカステペックはヤララに近い村で、おそらく山地サポテカの文化の中心地であるヤララから Huenches をまねてきたのだろう。6人の踊り手が大きな木製の仮面をつけて、内3人は女装で、踊り乱れていた。トラウィでは、10人ばかりのゴム製の仮面をつけた男が踊り、濃茶の木の仮面をつけた1人が踊り手の動きを制御して、楽隊に命令していた。伝統的な木の仮面は何年も前になくなり、今のゴム製仮面は司祭がメキシコ市で買い求めてきたものであった。Los Mal Viejos と Huenches はミチョアカンの有名な Los Viejitos とよく似ているが、形式化の度合いが少なく、足でとるステップの仕方もずっと単純である。しかし、乱舞 道化の仕方、ステップのとり方に多くの類似がみられる。タラスカンの人々はその伝統舞踊 Los Viejitos にスペインのサパテアード (zapateado) の様式を混合して、現今のミチョアカンの名物踊り、Los Viejitos ができ上ったわけであるが [KURATH AND MARTI 1964: 166], ヤララの Huenches の起源について、私は知ることができなかった。

年輩のインフォーマントによると、昔、San Miguel, San Tehuacan のダンスがあったそうであるが、これらについて詳細を知ることはできなかった。

これらのダンスが植民地時代にミヘ高地の諸村に入ってきたわけであるが、伝播の起源はヴィヤ・アルタとヤララにあると思われる。征服の頃、ヴィヤ・アルタは軍事・宗教の中心で、スペイン人、トラスカラの人々、ドミニコ派の宣教師がやってきた。そして、長い植民地時代を通じて、文化の中心点であり、ここを通じて山地のミヘは文明と接触した。一方、ヤララはトラコルーラや平地オアハカと経済関係が深く、ここからも諸々の植民地時代のダンスがミヘの村に入っていた、と考えてまちがいが無いだろう。

以上の推察は近年ミヘがどのようにダンスを取り入れ、保存しているかという事例にふれることで確かめられる。踊り手の話によると、Los Negritos や Los Cubanos の仮面はヤララで買い求めていた、ということである。Los Mal Viejos の仮面はゴ

ム製になってしまったが、一つだけ残っている木製の仮面はヤララでずっと以前に求められたものである、と言う。チチカステペックで Huenches のダンスの出所についてたずねると、「あのダンスはヤララで買った」という。この表現は植民地文化のミへ高地への伝播についての事実を明らかにしてくれる。ミへはヴィヤ・アルタとかヤララといった文化の中心で“文化”を買ったのであった。

1974年に Coloquios を再演してみせてくれた村の cantor は次のように語っている。「何年も前に、私共が Coloquios のダンスを買った時のことを今でも覚えています。このダンスの先生はトントンテペックから大勢の荷役をつれてやってきました。当時の金で500ペソも支払いました。こんな大金をかけたのに、台詞の書いてある紙を失ってしまって、今になると教えられなくなった」と。その結果、この cantor はマリンチェ役の女の子に台詞を教えたが、おそらく元々の台詞ではなかろう。マリンチェは、「グアダルルーベにこのダンスを捧げます。私達の持っていない王国を持ち、私達の持っていない空の光栄を持っていらっしゃるが故に、貴女をあがめたまつります」と語り始めるが、その後には今様のグアダルルーベの聖女の歌を唱うように教えられていた。

植民地時代のダンスの伝播の事例はアユトラの例にもみられる。約40年ほど前、ある踊り手はヴィヤ・アルタまで旅して、San José のダンスを習って、お金を支払った。アユトラに戻ると他の踊り手に教えこみ、今も San José はアユトラの名物のダンスになって残っている。このヴィヤ・アルタに行った踊り手の家にある長持ちの中から私は San José の台詞の一部を発見することができた。

ダンスの演じられる時間についても記しておかねばならない。元来、ダンスは教会に捧げられたものであるから、ミサのような宗教儀式の前に演じられるものであった。ミスストラはこの伝統を保持している。この村ではミサの前に Conquista や Malinche のダンスの踊り手が教会の前で踊る。行列のある時には、踊り手は行列の前に行われるミサに参加し、それから行列に加わる。この行列は先頭からみて、フルート奏者、太鼓打ち、サクリスタン、アコリテ（ローソク立てと香炉を持つ）、踊り手、楽隊、聖人像、司祭、一般の村人という順で組まれている。トラウィではダンスが元々持っていた宗教的意味は殆どその演出時にはでてこない。大体、どの祭りでもダンスは午後の3時頃に演じられる。アユトラではダンスはミサの終る少し前か、ミサの最中にはじまり、その気配で人が教会から出てダンスの行われているプラサに行くので、ミサのさまたげになりかねない。

踊り (bailes populares)

一般の村民が踊るのはハラベ・ミへ、ファンダンゴ・ミへ、レイ・コンドイの曲に合わせてである。ベタサ、その他のサポテカの村や町から伝わってきた曲もある。ハラベの起源はアラゴンのホタにあるとされている [KURATH 1969: 181]。ハラ

ベがメキシコで広がっていった経過については Stevenson が詳細に記しているの
 [STEVENSON 1952: 183-185, 216-217], ここでは省略する。ファンダンゴはタン
 ピコからヴェラクルスにかけて広がったウアパンゴと同系のリズムである [KURATH
 1969: 179; STEVENSON 1952: 217-218]。ハラベもファンダンゴも男女が組にな
 って踊るものであるが、トラウィでは酔いのまわっている時以外は男女で踊ること
 はない。男と女は別々の場所でひとりで踊る。これはインディオの伝統的村落で
 は一般的にみられる現象である。男と男、女と女がヤララ風に手と手を取って踊
 っていることもまれにあるが、これはチチカステペックのようにヤララの文化的影
 響の強い村でよくみうけられる現象であって、トラウィでは時々しかみうけられな
 い。

Castillo 花火と torito 花火, 闘牛 (jaripeo)

castillo 花火と闘牛は15~16世紀にスペインにひろがったモロ人とカトリック教徒
 をテーマとする祝祭複合に属する要素である [WARMAN 1972: 25-28]。castillo は
 城を意味し、モロ人の城を攻め、焼きおとすことでスペインの奪還を象徴するため
 に使われていた。元来は本当に城らしき建造物がつくられて焼かれていたが [WARMAN
 1972: 38], 仕掛花火で代行されるようになった [WARMAN 1972: 50, 60]。castillo
 という名前だけ残って、現在も祭りの仕掛花火が castillo と呼ばれているわけである。

闘牛は jaripeo とも corrida de toros とも言われ、上記の祝祭複合の中でも娯楽
 の要素のつよいものであった [WARMAN 1972: 33, 43, 48]。

torito 花火の起源については今のところ資料をえていない。

以前、花火職人はトラコルーラかヤララからきていた。その後、中部ミへの村、サ
 カテペックの人がサポテカ族より技術を学び、祭りの花火をうけおってトラウィにく
 るようになった。1963年頃、トラウィの人で花火の技術をサカテペックで習う人があ
 って、今や村の祭りの花火もアユトラやタマストラパムのような隣村の祭りの花火まで
 うけおって仕掛けるようになった。こういう技術はサポテカ族から習うことが多いの
 である。

軽業 (maroma) と道化 (payaso)

軽業はこの面でおののある男達によって演じられる。同じ顔ぶれがどの祭りにもでて
 くる。

道化は毎年、どの祭りにも同一人物が演じる。復活祭にローマの百人隊長を演じる
 人物で、仲々の芸人なのである。道化の韻をふんだスペイン語の台詞はヤララやオア
 ハカで教えられると言う。トラウィの道化はチチカステペックのものにくらべて簡略
 である。チチカステペックでは二人の道化が台詞をよくこなし、二人の台詞のやりと
 りが妙をえている。L. Ballesteros 氏の助力をえてこの台詞を転写することができた

が、台詞は非常にながく、タイプ用紙にシングル・スペースで打って2枚分も一人の道化がしゃべりつづけなくてはならない部分が多い。また、氏の判断によると、台詞にオアハカのゲラゲッツァ祭の道化の台詞からの影響が多く見うけられるとのことであった。チチカステベックの道化は時々即興に韻文や冗談をとばすが、トラウィの人々よりスペイン語になれているこの村人はすぐ理解し、笑うことができる。一方、トラウィの道化の台詞は短く、簡単である。ミスストラ村の道化と同じで、ミヘ語しか理解しない見物人を前にして、僅かしか話さないし、ミヘ語で短い冗談をとばすことが多い。

2. 変容した守護聖人の祭り

——ミヘの村、アユトラの例——

アユトラにみられ、トラウィになかった祭りの芸能の要素としてオアハカ市から雇われてくるオーケストラとメリー・ゴー・ラウンドがある。逆に、トラウィにはあってアユトラで失われているのはフルートと太鼓である。また、1933年のアユトラを記録した Ralph Beals はギター、ヴァイオリン、マンドリンが使用されている様を報告しているが [BEALS 1945: 74], 私がアユトラにいた1973年と1974年には、これらの楽器が守護聖人の祭りに使われるのをみたことはなかった。楽隊とレコード・プレーヤーが活躍していた。その他の祭りの要素はトラウィに見いだされるものと同じものである。要素は同じであるが、その内の幾つかの要素が“世俗化”の様相をおびていることが重要な差である。以下に、この点についてのべてみたい。

アユトラの *calenda* には男も女も参加し、トラウィのものにくらべて、人目にたつページェントになっている。陽がおちる前に *calenda* の列はムニシピオを出発する。楽隊のかなでる音楽にあわせて、その年の役人の親族や友人や近所の女や少女が花籠を頭上にささえながら踊る。役人の中でも高位のものが妻と共に行列の頭にたち、*mono* を持った人、少女達、楽士、村人がそれにつづく。ムニシピオの前でしばらく踊ってから、*calenda* の行列は教会の前に行き、そこでしばらく踊る。それから、また行列を組んでタマスラパム村寄りの村の端までいき、それからミトラ寄りのもう一方の村の端までいく。この二カ所で楽隊に合わせて行列は踊り、見物人も興にのっておどる。夕暮のなかで、音楽が村中にひびき、酔っぱらいと踊り手がどこにもみられる。これで *calenda* は終わり、トラウィのように夜中に *calenda* の行列が村中をねり歩くことはない。このタイプの *calenda* はオアハカ平野部のものらしく、トラウィのものとい対照をなしている。

他村からの楽隊のレセプションも“世俗化”してきた。1974年1月25日の San Pablo の祭りの日、レセプションのためにアユトラの役人はオアハカ市のコカ・コー

ラの支店と交渉して、マイクのついたマイクロ・バスを借りだした。村の端にこのマイクロ・バスを止めて、他村の楽隊をアユトラの楽隊が迎えている間中、役人はマイクロホンでしゃべって、あいさつした。他村からきた楽士はいささか驚き気味である。

ダンスは元来、教会に捧げられたものであるが、アユトラではダンスの宗教的な意味が全く消失してしまった。ダンスの演じられる時間と状況を考えてみると、そのように言うことができる。Los Negritos のダンスはまるで一般の世俗のダンスのように演じられている。例えば、1973年1月28日、San Pablo の祭りの折 Los Negritos は午後の1時から2時半にかけて演じられた。同じ時間に、教会ではミサがたてられていたし、市場では売買が進行していたし、運動場ではバスケット・ボールの試合が騒々しくおこなわれていたし、広場の下の空地では闘牛が行われていた。騒音でダンスの音楽もきこえにくいぐらいであった。

1933年、Beals がアユトラを訪れた時、この村には多くの儀礼的ユーモアの演出者がいた。Los Negritos のダンスにも viejo と呼ばれる仮面をつけた道化が何人も現われ、道化役と同時にダンスの警備役をもつとめた [BEALS 1945: 73, 80-81]。さらに、tiznado と呼ばれる白馬にまたがった道化が Los Negritos のダンスに道化役をつとめたらしい [BEALS 1945: 71, 73]。ところが、これらは今はなくなり、Los Negritos の踊り手だけが踊るのである。

アユトラの守護聖人の祭りはミへの伝統的祭りというよりメスティーンソの祭りになりつつある。この市場の村ではずっと前から、人々は陽気で世俗的な祭りになれてきた。この特徴は San José のダンスの演じ方と観衆の反応によくあらわれている。この同名のダンスはミストラン村でも演じられるが、そこでは陽気な雰囲気も見物人のダンスへの参加もない。これと対照的に、アユトラでは踊り手と見物人が積極的にダンスの雰囲気に入っていき、観客参加のある劇場めいた雰囲気が生まれ、ふざけと笑いのみちた祝祭空間が現出するのであった。

San José のダンスははじめから終りまで演じるのに約2時間かかる。さて、このダンスの一部で San José はその妻に台詞をかたる。María の役はブラウスとスカートで女装した若い男子がつとめていて赤子を抱いている。女の仮面をつけたものの、男の手足がのぞいている。

San José の台詞 (María と赤子に)

1° 坐りなさい、坐りなさい、この小さな椅子に。

この椅子に坐っているお前をみたいからよ。

可愛い人よ。私の贈る椅子だよ。

2° 坐りなさい、坐りなさい。この椅子に。

可愛い人よ。私が贈る椅子に。

坐りなさい、坐りなさい。この椅子に。(くりかえし)

- 3° 坐りなさい、坐りなさい、お母さん。
気に入って、よろこんで、みちたりて、
あこがれにみちて、坐っていて欲しい。
- 4° ここに足をおきなさい、ここに足をおきなさい。
かわいい足が傷つかないように。(くりかえし)
- 5° いらっしゃい、私のかわいい人よ。お前を抱くよ。
いらっしゃい、お前をゆさぶるよ。私のかわいい子供よ。
お母さんを探して、ミルクをもらおうよ。
- 6° お前の赤子をひきとりなさい、お前の息子をひきとりなさい。
そうでないと、お前をむち打ったり、たたくよ。
(ここで、María 役の者は3回歌う)

María の台詞 (赤子と San José に)

- 7° 泣かないで、泣かないで、私の息子よ。
泣かないで、泣かないで、私の魂よ。
泣かないで、泣かないで、小さな歌い手よ。
泣かないで、泣かないで、私の美しい子よ。
- 8° 泣かないで、泣かないで、私の魂よ。
泣かないで、泣かないで、私の心よ。
泣かないで、泣かないで、小さな心よ。
泣かないで、泣かないで、私の息子よ。
- 9° 寝ていなさい、寝ていなさい、息子よ。
寝ていなさい、寝ていなさい、人形さんよ。
お前の晴着を縫いましょう。
- 10° 玉子の入ったパンを食べなさい、砂糖の入ったパンを食べなさい、フランス・
パンを食べなさい、roseradito (意味不明) のパンを食べなさい。
- 11° チョコレートをのみなさい、キャラメルを食べなさい、ビスケットを食べなさい、
無作法をしてはいけませんよ。
- 12° 起きなさい、起きなさい、私の息子よ。
起きなさい、子よ、お父さんを探して、おぶってもらいましょう。
- 13° 洗礼もしていないこの子をうけとって下さい。
あなたの人形をうけとって下さい。
ほら、ほら、なんて可愛い子でしょう。
- San José と María の台詞
- 14° そのまま、そのまま、お母さんよ。
そのまま、そのまま、可愛い子よ。

子供がよろこぶハラベを一曲踊ろうよ。

Hay maravilloso, hay maravilloso, lloso, lloso, lloso, nito, nito, nito.

A larrorro nene, alarrorro nene, nene, nene, nene, nito chulo nito,

チョコレート, と玉子の入ったパン, 玉子の入ったパン, とチョコレート, 大変美味しい, 大変美味しい。

チョコレート, チョコ, チョコ, チョコ, チョコ, チョコ, チョコレート, 本当に美味しい, 本当に美味しい。

ダンスの間中, abuelo (老人) と呼ばれる道化が警備役にあたって, 見物人が踊り手の邪魔にならないようにしている。大きなワラ製のソンプレロをかぶり, 濃茶の木製の仮面で顔をおおい, 上着をつけ, 長い竹竿を手にしている。このいでたちから判断するに, Beals が viejo と名づけて描いている道化と同種類の道化と思われる [Beals 1945: 73, 80-81]。San José と María が台詞をのべている間, abuelo なる道化は酔って踊っているタマスラパムやトラウイの女にひわいな冗談をとぼしている。アユトラの女は家の中でしかアルコール類を口にしないので, この冗談の対象にはならない。topil は, 踊り手のはげしい足さばきで砂ぼこりがまきあがらないよう水をまいている。しかし, 彼も興にさそわれ, バケツを手にして踊りはじめています。スペイン語のわかる人は San José と María の台詞にジョークをさしはさんでいる。アユトラの女や少女は台詞をおぼえて, 家にかえって, 赤子にきかせようとしている。このように, San José のダンスは公共劇場にいるような零皿気をかもしだす。演じる者も, 補佐役も, 見物人も活発に劇場の演技に参加しているのである。

トラウイと同じく, 踊りはハラベ・ミヘ, ファンダンゴ・ミヘ, レイ・コンドイ, などの古典的な曲にあわせておこなわれている。同時に, 若者はレコード・プレーヤーや最近結成されたコンフント・アユーク (ミヘ楽団) という若者のエレキ・バンドの奏する流行曲に合わせて踊ることが多くなった。

アユトラの人々は世俗の雰囲気を楽しむことを知っている。学校の先生やプロモーターレスというインディオ局の職員の組織するダンス・パーティや, その他の娯楽の方が教会のミサや寓意劇より楽しいのである。守護聖人の祭日には, 教会の催す娯楽番組が先生の主催する番組と競争になる。二つの世界の対立は深刻な社会問題になりかねない。

3. メソ・アメリカの他地域からの比較例

メソ・アメリカのインディオのコミュニティ, もしくは民俗社会を扱った書物は数多いが, モノグラフとして基本的な資料をそなえているものはあまり多くない。守護聖人の祭りについても, 観察にもとづいた詳細な記述をととのえたモノグラフは意外

と数少ない。1960年以降、研究者の数は増えたにもかかわらず、調査は一定のテーマに集中するようになり、また、長期の調査をする人が増えたわけではないので、祭りの資料がえられるモノグラフは数多くない。なお、資料があることがわかりながら、入手できなかったモノグラフも二、三例あった。本論に入る前に、私の利用したモノグラフについて簡単な紹介をしておきたい。

地域別のコミュニティ名、部族名、調査者、調査時点（期間は明記せず）についてまとめると次のとおりである。

1. グァテマラのマヤ地域

チカステナンゴ（キチェ・マヤ， R. Bunzel, 1930-32）

チナウトラ（ポコмам・マヤ， R. Reina, 1953, 1955, 1958, 1960-61, 1962）

チマルテナンゴ（мам・マヤ， C. Wagley, 1937）

2. メキシコ、チャパス州のマヤ地域

シナカンタン（ツォツィル・マヤ， E. Vogt, 他, 1957 以降のハーバード・チャパス計画による集中調査）

アマテナンゴ（ツェルタル・マヤ， J. Nash, 1957, 1958, 1964, 1965）

3. オアハカ州

ミトラ（平地サポテカ， E. Parsons, 1929-33）

ヤララ（山地サポテカ， De la Fuente, 1937, 1938, 1939, 1940, 1941）

4. ユカタン半島

チャン・コム周辺（ユカテック・マヤ， R. Redfield と Villa Rojas, 1930, 1931, 1933）

5. メキシコ中央高原

テポストラン（ナワ， R. Redfield, 1926-1927）

6. ミチョアカン州

チェラン（タラスカン， D. Brand, 1939, 1941, 1942）

チンツンツェン（タラスカン， G. Foster, 1945-46）

イウアツィオ（タラスカン， Van Zantwijk, 1960-63）

7. メキシコ北部

ポタム（ヤキ， E. Spicer, 1939, 1941, 特に 1942, 1947）

これらのモノグラフの大半は、1年以上、もしくは2年近い調査にもとづくもので、メソ・アメリカについての出色の作品ばかりである。Wagley のチマルテナンゴが一年以下の調査によるものであるが、基本的資料がよくととのっている。Redfield のチャン・コムとテポストランのモノグラフは一時代を画したものであるが、共に短期間の調査の産物であり、資料の質は雑多である。Oscar Lewis のテポストランには祭りについて記述が欠けている。ミチョアカン地方の3つのモノグラフは記述が没個

性的であるが、1930—40年代の総合人類学の傾向に従っており、また、投入された人的資源も多かったためか、調査期間が短いわりには資料がととのっている。

時間的にも質の上でも差のあるモノグラフを資料にするため、本質的な意味での比較は望めないが、メソ・アメリカの守護聖人の祭りについての覚書を以下に記したい。私がこの研究ノートの第1部でトラウィ村の記述で抽出した芸能の要素の有無について各事例にあたって一々述べることはしないで、ミへの形にくらべて特記すべき要素と機能についてのみ論述してみたい。メソ・アメリカ研究の諸氏がのべているように、守護聖人の祭りには著しい画一性がある、第1部で記述したような基本型の変異型として各々のコミュニティの事例が位置づけられるからである。

1. グァテマラのマヤ地域

チチカステナンゴ

Santo Tomás の祭りが守護聖人の祭りであるが、この祭り自体は記述されていない。しかし、Santo Tomás の祭りは祭り一般の形とコフラディアと称される聖人を世話し、祭るグループの儀式をかねるので、この二つの形を重ね合わせることによって概要を知ることができる。祭り一般については Bunzel は María del Rosario の祭りの記述を残しているし、コフラディアの儀式の代表としては San Sebastián の祭りの記述を残しているからである。

コフラディアの儀式は、マヤ地域に一般的にみられるように、コフラディアの役人の交替をめぐる複雑な儀式の連続である [BUNZEL 1952: 226–254]。この儀式自体の記述と分析は独立の研究テーマになることなので、ここでは深くふれないことにし、コフラディアの儀式が守護聖人の祭りの重要な部分を占めていることの指摘にとどめたい。

コフラディアの儀式以外についての記述はくわしくない。カカオとアトレが儀礼上の飲物として重要であること、楽器にマリンバのあること、聖人の行列が数多くあること、などがミへの例と異なっている [BUNZEL 1952: 195–196, 197, 198]。

チナウトラ

守護聖人は Niño de Otoche で、コフラディア・アークルス祭りである。祭りの日は正式には9月13日であるが、トラウィの場合と同じ理由で、つまり、気候不順の故に、12月の1～3日におこなわれる [REINA 1966: 142]。コフラディアの儀式はこの村でも複雑を極めていく。マリンバの使われること、多くの聖人像の行列のあることも [REINA 1966: 145, 146, 148]、チチカステナンゴと似ている。聖人の行列の発達には強力なコフラディア（ミヘや、その他のオアハカ州ではマヨルドミーアに当るもの）の発達と関連があると言えよう。

この村では、ラディノへの依存が芸能の要素の中にもみられる。花火は自村でつく

られず、グアテマラ市から職人がくる。楽隊は自村になく、同じポコマム・マヤの他の村からよばれてくる。また、ダンスの衣裳はこれまた自村になく、トトニカパンというラディノの町から借りてこられる。このダンスは何のダンスか記されていないが、モロのダンスは既になくなってしまった。トトニカパンにはモレリーアと呼ばれるダンスの衣裳をつくったり、貸したりする店がある [BODE 1961: 235]。競馬は同村に居住するラディノだけでたのしまれ、踊りもインディオとラディノとは別々に行われるといったわけで、ラディノとインディオという複合社会の現実が芸能の要素と機能にも明白にでてくる [REINA 1966: 143, 145, 147, 149]。

チマルテナンゴ

チカステナンゴやチナウトラにくらべて小さな村で、文化的にも周辺文化の諸相をしめしている [WAGLEY 1949: 11]。コフラディアも発達しておらず、守護聖人の祭りの日にコフラディアの役職の交替が華々しく行われることもない [WAGLEY 1949: 84]。

芸能の要素ではチナウトラと類似した点が多い。ラディノの商人がウェウエテナンゴからくること、フルート、太鼓に加えてマリンバのあること、他村からくる聖人の行列のあること、などがそれらの点である [WAGLEY 1949: 107-109]。

この村で独特な要素としては、村の伝統的儀礼にたずさわるチマンが祭りの成功をいの儀式を行うことである [WAGLEY 1949: 107]。

また、この村ではトロ・ダンスが盛んに行われる。女装した男の踊り手がエロティックな演技をまじえておこなうダンスで、衣裳はチナウトラの場合と同様にトトニカパンから借りてくる。この町への旅は3日半かかり、衣裳をかりに旅立つ人々の旅の安全をいのって村人は送り出し、戻ると、華々しく迎える儀式を行う [WAGLEY 1949: 105-106]。守護聖人の祭りはサンチャゴの日、つまり、7月25日であるが、トロ・ダンスはその日のずっと前から8月9日までの25日間も演じられている [WAGLEY 1949: 109]。このトロ・ダンスについて詳細に説明するための資料をもたないが、グアテマラのトトニカパンを中心とする征服文化の伝播の歴史がわかれば解明できるだろう、と思われる。

2. メキシコ、チャパス州のマヤ地域

入手できたモノグラフはアマテナンゴとシナカンタンに限られている。他に、チャパス高地については Guiteras-Holmes の Chenalhó と Pozas の Chamula のモノグラフがあるが、入手していない。Chenalhó と Chamula については Bricker や Gossen の著作があるが、各々特定のテーマについて書かれたものなので、この研究ノートのための資料にはならない。

アマテナンゴ

コフラディアが発達しているので、守護聖人の祭りだけが大きな祭りということはない。主要なコフラディアの祭りである **Sacramento, Santa Lucia, San Pedro, San Francisco** の祭りが大きな祭りとなっている。祭りの芸能の要素については余り記述がないが、コフラディアの役人の交替が祭りの中心的な催しになっていることが明らかである [NASH 1970: 210-219]。

シナカンタン

この村の守護聖人は **San Lorenzo** である。この祭りでも役職の交替の儀式が祭りの中心的催し物になっている。祭りには馬術、castillo 花火など守護聖人の祭りに一般的な要素がでてくる。数々の聖人の行列のあることもグアテマラのマヤの例と同じである。楽器ではハープ、ヴァイオリン、ギターが出てくるし、太鼓のサイズが大きいこともオアハカ州と違う点といえよう。チナウトラの例と同じように、村内には楽隊がなく、近くのラディノの村から楽隊を招くことも、楽隊の発達したオアハカの村と異なる点である [VOGT 1969: 560-563]。

シナカンタンの守護聖人は **San Lorenzo** であるが、祭りの中で一番華やかなのは **San Lorenzo** ではなく、**San Sebastian** の祭りである事実を指摘しておかねばならない。この祭りの役職の交替の儀式には、英語名で記すと、**Spanish gentlemen, Spanish ladies, white heads, jaguars, crows, Spanish-moss-wearers, Blackmen**, といった数々の道化役がでてくる。彼らはセクシユルな演技で役職についている人からかい、そこに生じる無秩序を通じて、逆に職務履行の重要性を役職につく人に教える [VOGT 1969: 538-548]。これら道化役の演じる儀礼上のユーモアについては **Bricker** が詳細に分析しており [BRICKER 1973]、**Blackmen** の中に見いだされる伝統的なマヤの動物をめぐるシンボリズムについては **Blaffer** が詳細な研究を残している [BLAFFER 1972]。

3. オアハカ州

高地ミへの諸村と密接な経済・文化関係のある山地サポテカの村ヤララと平地サポテカの村ミトラについて詳細なモノグラフがあるので、ミへの事例、トラウィとアユトラと比較してみるのに大変役立った。他に、ミステカ族の事例をみいたと思ったが、祭りについての記述のあるモノグラフをえることはできなかった。

ヤララにはトラウィに見いだされた芸能の要素と機能に著しく似かよったものが見いだされる。フルート、太鼓、楽隊、calenda, marmota, mono, ダンス、踊り、castillo 花火、torito 花火、闘牛、軽業、道化、などである。ここには、トラウィの **Los Mal Viejos** の原形であると思われる **Huenches** のダンスもある [DE LA FUENTE 1949: 275-282]。差異を強いて探せば、**Malinche, Marcos** という名のトラウィにないダ

ンスがヤララにあることぐらいである [DE LA FUENTE 1949: 280]。

道路が1966年にアユトラまで入る前にはヤララのサポテカ商人のミヘ地域での経済活動は今よりずっと多かった。また、トラウィの人は中、低地のミヘの村々からコーヒーを運搬して、ヤララに持っていった。また、ヤララの San Antonio へ巡礼に行くトラウィの人も今より多かったという。といった事実を考えると、文化的に優越したヤララの祭りの芸能がトラウィのものに大きな影響を与えたであろうことは充分考えられる。ミスストランやチチカステペック村の人々はヤララの祭りを見物にいくのがすきであるし、De la Fuente による祭りの記述にミヘの見物人の姿が描かれていることも、上の推察を支持するようにみえる [DE LA FUENTE 1949: 280]。

一方、ミトラの守護聖人の祭りは San Pablo 祭で、アユトラと同じ聖人の祭りであり、両者の芸能の要素にはおどろくべき類似がみられる。ミトラはアユトラの市場を支配する平地サポテカ商人の町で、平地オアハカ文化がミヘ山地に流入する拠点であり、この町の祭りがミヘ、特にアユトラの祭りに多くの影響を与えた、と想像できる。特に、町風を好むアユトラにとって、ミトラの San Pablo 祭は祭りのモデルを提供した、と考えられる。それ以外の推測の入りこむ余地のないほどミトラとアユトラの San Pablo 祭はその芸能の要素と進行の形に類似点がみられる。下に相異点のみ記入したい。

ミトラの場合、San Pablo のマヨルドミーアがあるので、祭りの日にマヨルドーモの交替の式も行われる。しかし、この式はマヤ地域のコフラディアの役職の交替の儀式のように複雑なものでなく、新旧マヨルドーモの交替がローソクの取りかえ、行列、ミサで簡単に行われるだけである [PARSONS 1936: 239-240]。1962年以降、アユトラがミサだけを負担するマヨルドーモの形をとる前には、ミトラと同じマヨルドーモの形式をとっていた、と考えられる。この推測は私のインフォーマントの話と一致している。

marmota には San Pablo の入信の絵が描かれており、marmota 本来の宗教的意味を示している。都会の影響がミヘ山地よりずっと多いので、既に、1930年代に Parsons が調査した時点で、1970年代のアユトラより祭りの要素に多くの娯楽性がみられる。caballito とよばれる馬の乗り物、メリー・ゴーラウンド、映画、cucaña とよばれる綱渡りをして賞品をとる遊び、piñata というお菓子の入っている玉をたたいて、お菓子をおとす遊び（一般には、クリスマスの行事である）、闘鶏がそれらである [PARSONS 1936: 240-241, 243, 246, 249]。

4. ユカタン半島

Redfield のチャン・コム祭りの記述はチャン・コムのランチョの祭りで代表されているが、資料は実に僅かである。ユカタン半島に特有のハラナのダンスが他の地

域と異なる要素として目立つだけである [REDFIELD 1934: 156]。

5. メキシコ中央高原

Redfield のテポストランにも Lewis のテポストランにも守護聖人の祭りについての記述はほとんどない。しかし、この地域は伝統社会に早くから征服文化が浸透した地域なので、興味深い資料があるにちがいない。Madsen のナワの村のモノグラフ、*The Virgin's Children* にも祭りについて何の記述もみられない。Bonfil の Cholula のモノグラフではどのように扱われているか興味があったが、このモノグラフの入手は本稿には間に合わなかった。

6. ミチョアカン州

スペイン以前にはタラスカンの文化が栄え、征服以降はサン・フランシスコ派の布教がいきとどいたミチョアカン州では、守護聖人の祭りもさぞ華やかであろう、と予想していたが、チンツンツァン、キロガ、チェラン、の3つのモノグラフはすべてこの予想をうらぎるものであった。しかし、イファツィオには二元論にもとづく祭りの儀式の珍しい例がみられる。

チンツンツァン

守護聖人の祭りは10月4日の **San Francisco** の祭りであるが、ミサがあげられるだけで、一切の芸能の要素がみられない。名目のみの守護聖人の祭りであって、実際には **Nuestro Señor de Rescate** が村一番の大きな祭りである [FOSTER 1948: 218]。19世紀の末から20世紀にかけて天然痘が流行した時、このキリストが奇蹟をおこなって、流行をしずめたという由来から、信仰がたかまってきた。1920年代のカトリック神父への迫害の時代に、この祭りはますます商業的な色合いを持つようになって、今日に至っている。祭りの日付が四旬節の近くなので、四旬節さえもないがしろにされるようになった、とのことである [FOSTER 1948: 205]。

キロガ

ここでも守護聖人 **San Diego** の祭りは別に大きな祭りではない。この地の、反社会的雰囲気、農業組合の発達、比較的豊かな経済、純インディオ人口の欠如、近隣に有力な村のあること、などが守護聖人の祭りが衰退した原因と考えられる [BRAND 1951: 204]。

チェラン

この村はかろうじて守護聖人の祭りの一般形をとどめている。守護聖人、**San Francisco** の祭りには闘牛、花火、楽隊などが姿をみせる。しかし、モロのダンスには踊り手が3人しか現れないし（平常は8人で踊る）、祭りは上手に組織されていない。この村のモロのダンスで興味深いのは、モロの踊り手が乗馬姿で現れ、ダンスを踊る時にはじめておてくることである [BEALS 1946: 120, 121, 124]。

イファツィオ

守護聖人は San Francisco で、この祭りには2人の楽隊長がえらばれる。一人は Soldier captain と呼ばれ、村の楽隊をひきいる。他の一人は Moorish captain とよばれ、タラスカンの山の中から楽隊をよんでくる [VAN ZANTZWYJK 1967: 160]。

祭りの日の10月4日になると、教会の前に2楽隊がくる。そこには、村の男達は全員東側に、女達は西側に陣どっている。Soldier captain はナポレオン風の衣裳をつけ、タラスカンの土着神、Tata Huriata の象徴である黄金の鷲のかざりをつけていることが興味深い。一方、Moorish captain はモロ人の衣裳をつけ、タラスカンの月の神、Nata Kutsi の象徴である銀色の月をつけた杖を持っている。モロ人の象徴の月とタラスカンの土着の神のシンボルの一致がみられて興味深い [VAN ZANTZWYJK 1967: 160, 161]。

2人の captain にひきいられた2つのグループは各々聖人像を教会にはこび、ダンスをおどり、ついで、教会の正面入口の前で模擬戦を行う。キリスト教徒とモロ人の抗争が象徴化されているわけである。その後、各 captain は castillo 花火を各々の陣営と定まった場所で打ち上げ、ここでも勢力を競うようになっている [VAN ZANTZWYJK 1967: 161]。

7. メキシコ北部

コーラ、ウィチョル、タラウマラ、ヤキ、の例を検討したかったが、入手しえたモノグフフはヤキのものだけであった。

ポタム

ヤキの村、ポタムの守護聖人は St. Joseph であるが、今は祭られていない。以前には教会のパトロンである Holy Trinity の祭りと同じ位大きな祭りであった [SPICER 1954: 128]。

さて、今でも大きな祭りである Holy Trinity 祭は二元論的構成をとり、キリスト教の勝利を象徴した祭りである。赤組（モロ人を象徴する組で、村を流れる川の上流に住む人々によって構成されている）と青組（キリスト教徒を象徴する組で、川の下流に住む人々によって構成される）の2組で演じられる花火競争、太鼓争奪戦、模擬戦、赤組のモロ城の落城、教会への押しこみ、洗礼、といった矢つぎ早の儀礼が展開される [SPICER 1954: 142-146]。

このような二元論の色彩の濃い、キリスト教の勝利を象徴する儀礼はヤキに限らずコーラでも、その他の北部メキシコのインディオ社会に共通な要素である。守護聖人の祭りの記録に出会っていないので確定的なことは言えないが、北部メキシコのインディオの場合、どの祭りにでも二元論的象徴主義が特徴ではないか、と私は推測している。

おわりに

以上は覚書であって、文献がふえたり、入手できる文献が出てくると、そのつど書き足される性質のものである。

ダンス、踊り、音楽について筆者に知識がないので、リズムや動作についてまでは言及できなかった。

マヤ、オアハカ、メキシコ北部のタイプが一番はっきりしたタイプとして浮び上がった。ここでくりかえさないが、各々の地域、ないし文化領域によって守護聖人の祭りの芸能のありかたに差のあることがわかった。

芸能の地域差をつくる要因を考えるに、征服前の土着文化の芸能の性質（特に、マヤ、メキシコ北部の場合）、宣教師の持ちこんだ芸能の種類、他民族との接触関係（マヤ地域のラディオとインディオ関係、オアハカの例にみるミへとサポテカの関係、など）、文化変容の度合い、などの要因があげられよう。

芸能の地域差は祭りの経済、祭りの組織の仕方、結局は、宗教・行政組織の差と表裏一体をなすものであり、このテーマについては次稿にて扱いたい。

文 献

- BEALS, Ralph L.
 1945 *The Ethnology of the Western Mixe*. Univ. of Calif. Publications in American Archaeology and Ethnology 42 (1).
 1946 *Cherán: A Sierra Tarascan Village*. Smithsonian Institution, Institute of Social Anthropology Publication No. 2.
- BLAFFER, Sarah C.
 1972 *The Black-Man of Zinacantan: A Central American Legend*. Univ. of Texas Press.
- BODE, Barbara
 1961 *The Dance of the Conquest of Guatemala*. Middle American Research Institute Publication No. 27.
- BRAND, Donald D.
 1951 *Quiroga: A Mexican Municipio*. Smithsonian Institution, Institute of Social Anthropology Publication No. 11.
- BRICKER, Victoria R.
 1973 *Ritual Humour in Highland Chiapas*. Univ. of Texas Press.
- BUNZEL, Ruth
 1952 *Chichicastenango: A Guatemalan Village*. Publications of the American Ethnological Society XXII.
- DE LA FUENTE, Julio
 1949 *Yalálag: Una Villa Zapoteca Serrana*. Serie Científica I, Museo Nacional de Antropología, México.
- KURATH, G. P.
 1969 "Drama, Dance and Music." In Wauchope and Nash (ed.), *Handbook of Middle American Indians*, Vol. 6, pp. 158-190.

黒田 守護聖人の祭りにみられる民俗芸能について

KURATH, G. P. and Samuel MARTÍ

1964 *Dances of Anáhuac: The Choreography and Music of Pre-Cortesian Dances*. Viking Fund Publications in Anthropology No. 38.

NASH, June

1970 *In the Eyes of the Ancestors*. Yale Univ. Press.

PARSONS, Elsie C.

1936 *Mitla: Town of the Souls*. Univ. of Chicago Press (reprinted in 1970).

REDFIELD, Robert

1930 *Tepoztlán: A Mexican Village*. Univ. of Chicago Press.

1934 *Chan Kom: A Maya Village*. Univ. of Chicago Press (reprinted in 1962).

REINA, Ruben

1966 *The Law of the Saints: A Pokomam Pueblo and its Community Culture*. The Bobbs-Merrill Co.

SPICER, Edward H.

1954 *Potam: A Yaqui Village in Sonora*. American Anthropological Association Memoir No. 77.

STEVENSON, Robert

1952 *Music in Mexico*. N.Y. Thomas and Crowell Co.

VOGT, Evon Z.

1969 *Zinacantan: A Maya Community in the Highlands of Chiapas*. Belknap Press of Harvard Univ. Press.

WAGLEY, Charles

1937 *The Social and Religious Life of a Guatemalan Village*. American Anthropological Association Memoir Vol. 51, No. 4, Part 2.

WARMAN, Arturo

1972 *La Danza de Moros y Cristianos*. México, Sep-Setentas, Núm. 46.

VAN ZANTZWIJK, R. A. M.

1967 *Servants of the Saints: The Social and Cultural Identity of a Tarascan Community in Mexico*. Van Gorcum and Com. N. V. Assen.